

中国文学論集第二十五号抜刷
一九九六年十二月発行

明末清初における戯曲選本の纂輯

——明刻清康熙間重修本『綴白裘合選』について——

根ヶ山 徹

明末清初における戯曲選本の纂輯

——明刻清康熙間重修本『綴白裘合選』について——

根ヶ山 徹

一

北京大學圖書館古籍善本室に馬氏特藏本⁽¹⁾として四卷本、及び卷一の殘闕が、北京圖書館善本特藏部に卷四の一部が架藏される『綴白裘合選』(以下『合選』と略稱)は、これまでその存在は知られながらも、内容については必ずしも十分に明らかにされなかつた戯曲選本である。該書は封面、及び卷一本文首に列記される秦淮舟子、鬱岡樵隱、積金山人の三人の手に成るものごとくであり、封面左の識語に「『白裘』一書、昉自醒齋」とあることから、醒齋なる人物の『白裘』を祖本にしたものと思われる。冒頭には康熙二十七年(一六八八)の刊記を有する華陽山人の敘文が置かれており、明末の刻本に、封面右に明記する金陵の書肆「翼聖堂」⁽³⁾が康熙年間に重修を施して梓行したものであることが明らかである。因に敘文の冒頭に「山人選六十種之絶妙以成書、猶採千狐之腋以成裘者也」と言いながら、實際には三十九種の戯曲の八十七齣の散齣しか収められておらず、現存する四卷本は恐らく完本ではない。

さて『綴白裘』といえは、清中葉の乾隆二十九年(一七六四)から同三十九年(一七七四)の間に蘇州の寶仁堂から上梓された十二篇(以下「通行本」と略稱⁽⁴⁾)が想起される。「通行本」の序文によれば、『綴白裘』は玩花主人が編んだ祖本に錢德蒼が補綴を施して成立したものと言明され⁽⁵⁾、八十五種四三一齣の散齣が収められる他に、梆子腔二十一齣、雜齣五十齣の合計五〇二齣が輯録されている⁽⁶⁾。これらは實際の上演に基づいて情節の記録に重きを

明末清初における戯曲選本の纂輯(根ヶ山)

置き、あるいは上演や観劇の便に供すべく編まれたものであることから、原作脚本との異同がかなり見いだされる。「通行本」との関係については別稿で改めて論ずるものとし、本稿では、編者のみならず、輯録する内容も「通行本」とは全く別趣である『合選』の内容について報告すると同時に、明末に数多く上梓された戯曲選本の中の該書の位置について明らかにしようとするものである。

二

『合選』に輯録される散齣は以下の通りである。本表では原作脚本における齣數、標目、及び脚本の種類を注記する。依據した原作脚本については、異同の有無を問わず汲古閣本（略稱「汲」）、繼志齋本（同「繼」）、世徳堂本（同「世」）、存誠堂本（同「存」）、文林閣本（同「文」）、刊本（同「刊」）、鈔本（同「鈔」）で明記した。また現存する原作脚本において當該の齣を見いだせないもの（同「？」）、既に佚して見ることのできないもの（同「佚」）についても明示した。尚、「通行本」については輯録篇數と標目を注記し、戯曲自體が未輯録のものには×を、散齣が未輯録のものには一を附した。

『合選』	原作	『通行本』
卷一『琵琶記』		
「伯喈慶壽」	第2齣「高堂稱慶」	6篇「稱慶」
「蔡公逼試」	第4齣「蔡公逼試」	2篇「逼試」
「南浦囑別」	第5齣「南浦囑別」	8篇「分別」「長亭」
「臨粧感歎」	第9齣「臨粧感歎」	—
「琴訴荷池」	第22齣「琴訴荷池」	3篇「賞荷」
「中秋望月」	第28齣「中秋望月」	—

『北西廂』

〔佛殿奇逢〕

第1齣 〔佛殿奇逢〕

〔汲〕

〔琴心挑引〕

第8齣 〔琴心寫懷〕

〔汲〕

〔錦字傳情〕

第9齣 〔錦字傳情〕

〔汲〕

〔月下佳期〕

第13齣 〔月下佳期〕

〔汲〕

『荆釵記』

〔荆釵成聘〕

第6齣 〔議親〕

〔汲〕

〔誤報訃音〕

第34齣 〔誤訃〕

〔汲〕

〔十朋祭江〕

第35齣 〔時祀〕

〔汲〕

〔拷問梅香〕

第46齣 〔責婢〕

〔汲〕

〔新婚遊賞〕

第8齣 〔遊春〕

〔汲〕

『白兔記』

〔獵回詢父〕

第31齣 〔憶母〕

〔汲〕

『草廬記』

〔怒走范陽〕

〔?〕

〔汲〕

『尋親記』

〔逆旅逢親〕

第32齣 〔相逢〕

〔汲〕

『金釧記』

〔鬪草遺釧〕

〔佚〕

〔汲〕

『四德記』

〔捷報三元〕

第34齣 〔榮封〕

〔汲〕

卷二

『幽閨記』

〔打牛被擄〕

〔?〕

〔汲〕

〔兵火遠離〕

第13齣 〔相泣路岐〕

〔汲〕

〔兄妹避難〕

第14齣 〔風雨門關〕

〔汲〕

〔途中邂逅〕

第17齣 〔曠野奇逢〕

〔汲〕

〔幽懷密訴〕

第32齣 〔幽閨拜月〕

〔汲〕

『香囊記』

〔郵亭寄宿〕

第29齣 〔郵亭〕

〔汲〕

『綵樓記』

〔破密分袂〕

第12齣 〔辨踪潑粥〕

〔鈔〕

『金印記』

〔蘇秦自嘆〕

第16齣 〔刺股〕

〔暖〕

明末清初における戯曲選本の纂輯（根ヶ山）

—	4 篇	〔潑粥〕	—
—	6 篇	〔拜月〕	—
—	10 篇	〔踏傘〕	—
×	10 篇	〔走雨〕	—
×	×	×	×
×	×	×	×
×	1 篇	〔飯店〕	×
×	3 篇	〔回獵〕	—
—	—	—	—
—	8 篇	〔男祭〕	—
—	—	—	—
×	×	×	×
×	×	×	×
×	×	×	×

〔周氏燒香〕

〔禁苑呼名〕

〔攜妓遊江〕

〔攜妓東山〕

〔泛舟赤壁〕

〔驛女掃亭〕

〔范蠡遊春〕

〔蠡迎西施〕

〔西施採蓮〕

〔西施憶鄉〕

〔范蠡扁舟〕

〔連環記〕

〔花亭賞春〕

〔月下投機〕

〔計就連環〕

〔楚營夜飲〕

〔戴月追賢〕

〔佛殿奇逢〕

〔隔牆酬和〕

〔遣婢請生〕

〔臨期反約〕

〔玉簪記〕

〔談經聽月〕

第29齣〔焚香保夫〕〔刊〕

第28齣〔禁苑奇逢〕〔汲〕

〔佚〕

〔佚〕

〔佚〕

第2齣〔文〕

第23齣〔文〕

第30齣〔文〕

第34齣〔文〕

第46齣〔文〕

第5齣〔教妓〕

十第13齣〔賜環〕〔鈔〕

第18齣〔拜月〕〔鈔〕

第20齣〔小宴〕〔鈔〕

第14齣〔夜宴〕〔汲〕

第22齣〔北追〕〔汲〕

第5齣〔佛殿奇逢〕〔汲〕

第9齣〔唱和東牆〕〔汲〕

第17齣〔東閣邀賓〕〔汲〕

第23齣〔乘夜踰垣〕〔汲〕

第8齣〔譚經〕〔汲〕

×

10篇〔前訪〕

10篇〔採蓮〕

10篇〔賜環〕

10篇〔拜月〕

12篇〔小宴〕

7篇〔遊殿〕

4篇〔請宴〕

9篇〔跳牆〕〔着基〕

卷四

『紅漢記』	〔垂釣關情〕	第13齣	〔鈔〕	×	×
『紅拂記』	〔伏策渡江〕	第2齣	〔汲〕	×	×
『玉合記』	〔俠女私奔〕	第10齣	〔汲〕	×	×
『綠綺記』	〔同調相憐〕	第12齣	〔汲〕	×	×
『紫釵記』	〔邂逅章臺〕	第5齣	〔汲〕	×	×
『題紅記』	〔月下聽琴〕	〔佚〕			
『霜紅寫怨』	〔墮釵燈影〕	第6齣	〔汲〕	×	×
『金水還題』	〔淚燭裁詩〕	第39齣	〔汲〕	×	×
	〔霜紅寫怨〕	第17齣	〔繼〕	×	×
	〔金水還題〕	第18齣	〔繼〕	×	×
『玉玦記』	〔別目勸學〕	第33齣	〔汲〕	×	×
『春蕪記』	〔園中邂逅〕	第12齣	〔汲〕	×	×
『玉環記』	〔玉簫寄眞〕	第11齣	〔汲〕	×	×
『金丸記』	〔兩世姻緣〕	第32齣	〔汲〕	×	×
	〔盒隱潛龍〕	第21齣	〔鈔〕	×	×
	〔搜求粧盒〕	第23齣	〔鈔〕	×	×
	〔玉簫寄眞〕	第32齣	〔泉逢簫玉〕	×	×
	〔園中邂逅〕	第12齣	〔汲〕	×	×
	〔懸盡賣身〕	第29齣	〔商嫖〕	×	×
	〔別目勸學〕	第33齣	〔汲〕	×	×
	〔孺護郎寒〕	第31齣	〔汲〕	×	×
	〔墮計銷魂〕	第21齣	〔汲〕	×	×
	〔姑阻佳期〕	第21齣	〔汲〕	×	×
	〔詞妬鸞凰〕	第19齣	〔汲〕	×	×
	〔寄弄〕	第16齣	〔汲〕	×	×
	〔琴挑〕	4篇			
	〔失約〕	8篇			
	〔當巾〕	10篇			
	〔鵝毛雪〕	6篇			
	〔別目〕	12篇			

〔灌園記〕	〔君后授衣〕	第19齣	〔溪口收春〕	〔汲〕	×
〔復位〕	〔君后授衣〕	第16齣	〔君后授衣〕	〔汲〕	×
〔投筆記〕	〔投筆覓封〕	第26齣	〔迎立世子〕	〔汲〕	×
〔金錢問卜〕	〔金錢問卜〕	第5齣	〔投筆空回〕	〔存〕	×
〔夷邦酌月〕	〔夷邦酌月〕	第11齣	〔母妻問卜〕	〔存〕	×
〔竊符記〕	〔祝賢公子〕	第14齣	〔賞月離婚〕	〔存〕	×
〔祝髮記〕	〔祝賢公子〕	第6齣	〔如姬感穩燒夜香〕	〔繼〕	×
〔青衫記〕	〔達磨點化〕	第21齣	〔魏王失符責如姬〕	〔繼〕	×
〔還帶記〕	〔坐濕青衫〕	第18折	〔繼〕		
〔彩毫記〕	〔坐濕青衫〕	第28齣	〔坐濕青衫〕	〔汲〕	×
〔紅梨記〕	〔綠野優游〕	第41齣	〔綠野團圓〕	〔世〕	×
〔明珠記〕	〔明皇賞花〕	第13齣	〔脱靴捧硯〕	〔汲〕	—
〔驛館藏書〕	〔再訪素秋〕	第6齣	〔赴約〕	〔汲〕	×
〔明珠重合〕	〔月下窺花〕	第6齣	〔由房〕	〔汲〕	×
	〔驛館藏書〕	第25齣	〔煎茶〕	〔汲〕	×
	〔明珠重合〕	第41齣	〔珠圓〕	〔汲〕	×
			5篇	〔訪素〕	
				〔渡江〕	

輯録される戯曲の時代について贅言するならば、元の王實甫撰『北西廂記』、元末明初の高明撰『琵琶記』、柯丹邱撰『荆釵記』、劉唐卿撰『白兔記』、施惠撰『幽閨記』、明初の闕名撰『草廬記』、邵燦撰『香囊記』、闕名撰『綵樓記』、蘇復之撰『金印記』、沈采撰『四節記』、王濟撰『連環記』、沈采撰『千金記』、鄭若庸撰『玉玦記』、闕名撰『玉環記』、姚茂良撰『金丸記』、沈采撰『還帶記』、天順の邱濬撰『伍倫記』、『投筆記』、成化の沈受先撰『四德記』、正徳の陸采撰『明珠記』、嘉靖・隆慶の謝謙撰『四喜記』、李日華撰『南西廂記』、顧大典撰『青衫記』、梁辰魚撰

『浣沙記』、萬曆の沈璟撰『紅蓮記』、張鳳翼撰『紅拂記』、『灌園記』、『竊符記』、『祝髮記』、屠隆撰『彩毫記』、湯顯祖撰『紫釵記』、梅鼎祚撰『玉合記』、徐復祚撰『紅梨記』、王驥德撰『題紅記』、王鏊撰『尋親記』、『春蕪記』、高濂撰『玉簪記』、薛近兗撰『綉襦記』、楊柔勝撰『綠綺記』である。闕名撰『金釧記』のごとく成立年代が確定できないものも存するけれども、下限は萬曆期の作品であると考えて差し支えあるまい。加えて敘文中に「有明隆萬之間」なる語が見えることから、該書の上梓は萬曆年間を遡ることはないと思われる。

三

前述のごとく「通行本」所收の散齣には原作脚本に大幅な變改が施されているけれども、『合選』の場合は原作脚本と如何なる關係を有するのか。以下に兩者の曲白を對校し、異同の有無について明らかにしたい。

『合選』に收められる三十九種の戯曲のうち『琵琶記』、『北西廂記』、『荆釵記』、『白兔記』、『尋親記』、『四德記』、『幽閨記』、『香囊記』、『金印記』、『四喜記』、『千金記』、『南西廂記』、『玉簪記』、『綉襦記』、『玉玦記』、『春蕪記』、『玉環記』、『紅拂記』、『玉合記』、『紫釵記』、『灌園記』、『青衫記』、『彩毫記』、『紅梨記』、『明珠記』の二十四種は汲古閣六十種曲、暖紅室彙刻傳奇に輯録されている。これらのうち以下のものに異同が見いだされる。

『琵琶記』「伯喈慶壽」は汲古閣本【錦堂月】三・四曲目を刪去し、同「中秋望月」は汲古閣本冒頭の【念奴嬌引】【生查子】を刪去する。『北西廂記』「琴心挑引」は汲古閣本末尾の【絡絲娘煞尾】を刪去する。『四喜記』「禁苑呼名」では汲古閣本の【簇御林】二曲目と【懶畫眉】の間の白の一部を【鷓鴣天】曲に改める。『千金記』「楚營夜飲」は汲古閣本の【風入松】二曲目、【駐馬聽】一・二曲目を、同「戴月追賢」は汲古閣本の【隨事興】、【奈子花】一・二曲目を刪去する。『南西廂記』「臨期反約」の【畫眉序】【皂羅袍】の間にある【梁州序】二曲、【玉芙蓉】四曲は汲古閣本には見えないが、暖紅室本とは異同が無い。しかしながら、これらは單なる曲辭の増刪にとどまり、内容の變改にまで及ぶものではない。『金印記』の場合、「蘇秦自嘆」は暖紅室本に一致し、「周氏燒香」は明刊本に一致する。

これらとは別趣で單行の刊本、鈔本のみ現存するものについては以下のようなものである。

先ず刊本として文林閣本の存する『浣沙記』、繼志齋本の存する『紅藻記』『題紅記』『竊符記』『祝髮記』、世徳堂本の存する『還帶記』、存誠堂本の存する『投筆記』には原作との異同は認められない。

鈔本のみ存する『綵樓記』『連環記』『金丸記』については以下のごとくである。

『綵樓記』『破審分袂』は鈔本の第十二齣「辨踪潑粥」に相當する。『合選』では【金瓏璫】【步步嬌】【又】【江兒水】【又】【香柳娘】【賽紅娘】【哭相思】【漁家傲】【剔銀燈】【麻錦花】【麻婆子】【哭相思】【又】の十四曲から、鈔本『綵樓記』では【越調過曲・入破】【中呂過曲・駐雲飛】【前腔】【前腔】【仙呂過曲・步步嬌】【前腔】【仙呂過曲・江兒水】【前腔】【南呂過曲・香柳娘】【尾聲】の十曲から成る。内容を詳細に對校すると、『合選』六曲目【香柳娘】と鈔本九曲目【南呂過曲・香柳娘】だけが同じ内容であり、他にはかなりの出入が見いだされる。

『連環記』『花亭賞春』の場合は、鈔本の第五齣「教妓」と第十三齣「賜環」の二齣を合わせた形になっている。まず『合選』では【清江引】【又】【西地錦】【二郎神】【又】【集賢賓】【又】【猫兒墜】【又】【尾聲】の順で曲辭を連ねる。一方、鈔本『連環記』の場合、先ずは第五齣「教妓」は【雙調北曲・清江引】【前腔】の二曲から、第十三齣「賜環」は【黃鍾引子・西地錦】【商調過曲・二郎神】【集賢賓】【前腔】【猫兒墜】【前腔】【尾聲】の七曲からなる。鈔本には『合選』の【二郎神】二曲目が見られず、白には兩者間で若干の異同が存するものの、曲辭には殆ど異同が見いだせない。

『金丸記』『盒隱潛龍』は鈔本の第二十一齣に、「捜求粧盒」は同第二十三齣に相當する。『合選』『盒隱潛龍』、鈔本は共に【步步嬌】【江兒水】【園林好】【川撥棹】【又】【五供養】【僥僥令】【又】【尾聲】の九曲から成る。

同「捜求粧盒」では【調金門】【鎖南枝】【又】【六么令】【又】【風入松】【又】【玉交枝】【又】【江兒水】【又】【又】の十二曲から成るが、鈔本には『合選』の【玉交枝】二曲が見られず十曲から成る。ここでも白には兩者間で若干の異同が存するけれども、曲辭の字句には殆ど異同が見いだせない。

また富春堂本の『草廬記』、世徳堂本の『伍倫記』については全く別系統の脚本であると思われる、『合選』に輯録された散齣は原作脚本には見られない。

因に『金釧記』『四節記』『緑綺記』は原作が佚して傳わらず、とりわけ『緑綺記』は『合選』によってのみ見られるものである。

このように『合選』所収の散齎は、該書の編纂にあたって依據した版本の相違による内容の異同は見られるものの、「通行本」のように原作脚本の變改にまで及ぶものは見いだせない。

四

戯曲脚本が時代の推移、傳播した地域によって少なからぬ變容を遂げていることは周知のごとくである。本節では上掲の原作脚本との曲白の異同に基づき、同時期に上梓された戯曲選本と對校することによって、『合選』の編纂に際して、どの時期の、如何なる地域の脚本を輯録したもののかを明らかにし、明末に數多く上梓された戯曲選本のなかでの位置づけを探りたい。

『合選』と同時期の明末に上梓された戯曲選本には以下のものが存する。¹⁰⁾

- ・ 梯月主人選輯・隱之道民校點『吳歛萃雅』、萬曆四十四年（一六一六）周之標刻本。
- ・ 吳趨仰拙許字校點『詞林逸響』、天啓三年（一六二三）萃錦堂刻本。
- ・ 冲和居士選『新鐫出像點板怡春錦（纏頭百練）』、崇禎間刻本。
- ・ 冲和居士選『新鐫出像點板纏頭百練二集』、崇禎三年（一六三〇）刻本。
- ・ 即空觀主人（凌濛初）評訂・椒雨齋主人點參『南音三籟』、明末刻本。
- ・ 沛國凌虛子漢瞻父輯『月露音』、明萬曆間刻本。
- ・ 闕名輯『賽徵歌集』、明萬曆間刻本。
- ・ 洞庭蕭士選輯・湖南主人校點『新刻點板樂府南音』、明萬曆間刻本。
- ・ 止雲居士選輯・白雲山人校點『新鐫出像點板北調萬壑清音』、明天啓四年（一六二四）刻本。
- ・ 吳中宛瑜子手定『新刻出像點板增訂樂府珊瑚集』、明末刻本。

明末清初における戯曲選本の纂輯（根ヶ山）

- ・鋤蘭忍人選輯・媚花香史批評『新鐫繡像評點玄雪譜』、明末刻本。
 - ・方來館主人點較『萬錦清音』、明末刻本。
 - ・玉茗堂主人（湯顯祖）點輯『聽秋軒精選萬錦嬌麗』、明末刻本。
 - ・豫章劉君錫輯『新鐫梨園摘錦樂府菁華』、萬曆二十八年（一六〇〇）書林三槐堂王會雲刻本。
 - ・吉州八景居士輯『鼎刻時興滾調歌令玉谷新簧』、萬曆三十八年（一六一〇）書林劉次泉刻本。
 - ・徽歙龔正我輯『新刊徽板合像滾調樂府官腔摘錦奇音』、萬曆三十九年（一六一一）書林敦睦堂張三懷刻本。
 - ・古臨玄明黃文華選輯・瀛濱綉甫全纂『新刻京板青陽時調詞林一枝』、萬曆間閩建書林葉志元刻本。
 - ・汝州黃文華精選『鼎鐫崑池新調樂府八能奏錦』、萬曆間書林愛日堂蔡正河刻本。
 - ・教坊掌教司扶搖程萬里選・後學庠生冲懷朱鼎臣集『鼎鐫徽池雅調南北官腔樂府點板曲響大明春』、萬曆間閩建書林拱唐金槐梓行本。
 - ・汝川黃文華選輯『新鐫精選古今樂府滾調新詞玉樹英』、萬曆二十七年（一五九九）書林余紹崖繡梓本。
 - ・秦淮墨客（紀振倫）選輯『新刊分類出像陶真選粹樂府紅冊』、萬曆三十年（一六〇二）唐振吾刊・嘉慶五年（一八〇〇）新鐫本。
 - ・豫章饒安股啓聖彙輯『新鐫天下時尚南北新調堯天樂』、萬曆間閩建書林熊稔實繡梓本。
 - ・閩建書林熊稔實輯『新調天下時尚南北徽池雅調』、萬曆間潭水燕石居主人刻本。
 - ・江湖黃儒卿彙選『新選南北樂府時調青崑』、明末書林四知館繡梓本。
 - ・安成阮祥字編『梨園會選古今傳奇滾調新詞樂府萬象新』、明末書林劉齡甫刻本。
 - ・闕名輯『新鐫彙編雜樂府新聲雅調大明天下春』、明末刻本。
- これらの選本は輯録される散齣が行われた時代と傳播した地域によって、明代前半期以降、吳地方に流傳した吳本系の『吳歙萃雅』『詞林逸響』『怡春錦』『纏頭百練二集』『南音三籟』、明代中期以降、南京に流傳した京本系の『月露音』『賽徵歌集』『樂府南音』『萬壑清音』『冊冊集』『玄雪譜』『萬錦清音』『萬錦嬌麗』、同じく徽州に流傳した徽本系の『樂府菁華』『玉谷新簧』『摘錦奇音』『詞林一枝』『八能奏錦』『大明春』、更に明末清初に江西弋陽を經

由して福建、廣東、湖南、四川に流傳した弋陽腔本系の『玉樹英』『樂府紅珊』『堯天樂』『徽池雅調』『時調青崑』
『樂府萬象新』『大明天下春』に分かつことができる。

これらの選本のなかで『合選』所收の散齣を汲古閣本、暖紅室本に索めることができるものは、全て呉本系の『吳歛萃雅』『詞林逸響』『怡春錦』『纏頭百練二集』『南音三籟』、あるいは京本系の『賽徵歌集』『萬壑清音』『玄雪譜』と異同が見いだせない。

『合選』所收の散齣と現存する原作脚本との異同が見られた『綵樓記』『連環記』『金丸記』、あるいは一致しない『草廬記』『伍倫記』をこれらの選本と比較すると以下のとおりである。

先ず原作脚本と異同が見られる『綵樓記』『破窰分袂』は呉本系の『怡春錦』南音獨歩樂集「別試」、京本系の『賽徵歌集』巻六「破窰分袂」、同『玄雪譜』巻二「歸窰」とは全く同様であるけれども、呉本系の『詞林逸響』月巻「離情」では【麻錦花】を【破地錦花】に作り曲辭に若干の異同が見られる。

『連環記』『花亭賞春』の場合、原作脚本では二齣に分割されるものの京本系の『賽徵歌集』巻六「退食懷忠（退食懷忠）」とは同様である。弋陽腔本の『樂府紅珊』巻十四忠孝節義類「王司徒退食懷忠」では白の増刪が著しい。

同「月下投機」は京本系の『玄雪譜』巻四「設計」とは異同が見られない。呉本系の『南音三籟』戲曲上巻・戲曲下巻「忠謀」では【么令】を【六么令犯】に作るものの曲辭の變改は無く、『吳歛萃雅』貞集「忠謀」、『詞林逸響』月巻「忠謀」、『纏頭百練二集』漢官儀樂卷「忠謀」では【么令】を【六令兒】に作り曲辭にも手が加えられている。

『金丸記』『盒隱潛龍』の場合は、京本系の『賽徵歌集』巻三「盒隱潛龍」では途中の【川撥棹】二曲が異なり、【泣顔回】二曲が新たに加えられているが他に異同は無い。弋陽腔本系の『徽池雅調』巻一「盒隱潛龍」とは全く異なる。

同「搜求粧盒」は京本系の『賽徵歌集』巻三「搜求粧盒」に同一であるが、徽本系の『樂府菁華』巻之二「陳琳粧盒匿主」、同『玉谷新簧』巻之下「陳琳粧盒匿主（陳琳粧盒藏主）」、同『大明春』巻之二「陳琳救主」、弋陽腔

本系の『樂府紅冊』卷十四忠孝節義類「劉娘娘搜求粧盒」、『樂府萬象新』前集卷之二「陳琳粧盒匿主」には曲辭、白の大幅な増刪が見られる。

また原作脚本に相當する齣が見られない『草廬記』「怒走范陽」は京本系の『萬壑清音』卷之二「怒走范陽」に全く同様である。

『伍倫記』「打牛被擄」については『合選』にのみ收められる散齣であり、詳細は明らかにできない。

このように、原作脚本と合致する散齣のみならず、現存する原作脚本と異同が認められるものについても、基本的に呉本系もしくは京本系の戲曲選本と同一である。明代の脚本分化の過程として呉本を純化した閩本を經由して京本が成立したことからすれば、『合選』は呉本以來の古形を遺した京本系の戲曲選本であると言えよう。

五

以上のごとく、原作脚本、及び同時代の戲曲選本との對校からすれば、明末において南京などの大都市の讀書人階層を主たる觀客層とする京本系の脚本を收める選本であることが明らかである。

『合選』が演出ではなく、讀曲のための脚本であることは、該書に設けられる眉欄の隨所に他本との異同、音注、語釋の他に、各散齣の用字や構成に關する校語が施されていることから明らかである。こうした校語はいずれも該書を読み、鑒賞する際のためのものであることは言うまでもなく、讀者の理解を助けるためには充分である。因に戲曲脚本に校語が施されたものは數多く存するけれども、同時期の戲曲選本には皆無である。言うまでもなく、清重修部分には校語は無い。また『琵琶記』「蔡公逼試」「琴訴荷池」「中秋望月」、『北西廂記』「佛殿奇逢」「錦字傳情」、『荆釵記』「荆釵成聘」「誤報訃音」「拷問梅香」、『白兔記』「獵回詢父」、『金釧記』「鬪草遺釧」、『幽閨記』「途中邂逅」「幽懷密訴」、『香囊記』「郵亭寄宿」、『金印記』「蘇秦自嘆」、『四喜記』「禁苑呼名」、『四節記』「泛舟赤壁」、『浣沙記』「范蠡遊春」「蠡迎西施」、『連環記』「花亭賞春」「計就連環」、『千金記』「戴月追賢」、『南西廂記』「隔牆酬和」「臨期反約」、『玉簪記』「談經聽月」「姑阻佳期」、『綉襦記』「襦護郎寒」「剔目勸學」、

『玉環記』『玉簫寄眞』、『金丸記』『搜求粧盒』、『紅拂記』『俠女私奔』、『玉合記』『邂逅章臺』(清補修)、『紫釵記』『墮釵燈影』(清補修)、『灌園記』『復位』、『竊符記』『祝賢公子』、『祝髮記』『達磨點化』、『還帶記』『綠野優游』、『明珠記』『明珠重合』には挿圖が施されていることも、該書が讀曲に供されたものであることを如實に物語つていよう。

ともあれ、『合選』は「通行本」同様に『綴白裘』なる名稱を有しながら、京本系の選本であり、かつ讀曲用の脚本としての機能を有していたことからすれば、實際の上演に基づいているが故に原作脚本の大幅な變改が認められ、かつ上演や觀劇に供され、しかも地方劇をも輯録する所謂「蘇白演出本」の「通行本」とは全く異なる系統に位置するものであることは明らかである。『綴白裘』には『合選』以降「通行本」上梓に至るまでに、康熙三十三年(一六九四)序・乾隆四年(一七三九)重刊の慈水陳二球參訂・玩玉樓主人重輯「新刻較正點板崑腔雜劇綴白裘全集」、雍正二年(一七二四)の陳二球序・友聚藏版『綴白裘』、雍正年間の楊仲芳校正『續綴白裘』、洞庭簫士選輯・湖南主人校點『綴白裘三集』などの存在も報告されており、演變の實態は多様を極めていと言わざるを得ない。

注

- (1) 馬廉藏書については大塚秀高氏「北京觀書記 その一—北京大學と馬氏書—」(『汲古』第七號、汲古書院、一九八五)に詳しい。
- (2) 孫楷第氏「綴白裘合選四卷」(『戲曲小説書目解題』、人民文學出版社、一九九〇)、傅惜華氏『明代傳奇全目』(引用書籍解題)(人民文學出版社、一九五九)、吳新雷氏「綴白裘」的來龍去脈」(『南京大學學報』一九八三年第三期)、周妙中氏「江南訪曲錄要」(『文史』第二輯、中華書局、一九六三)・「綴白裘合選」(『清代戲曲史』第七章「曲選和曲譜」、中州古籍出版社、一九八七)。
- (3) 楊繩信氏編著『中國版刻綜録』(陝西人民出版社、一九八七)「清代版刻」の條には、李漁の「金陵翼聖堂」刊『四六

明末清初における戲曲選本の纂輯(根ヶ山)

- 初徴』十六卷（康熙十年刊）、及び『翼聖堂』刊『閑情偶寄』十六卷が著録される。
- (4) 本稿では「武林鴻文堂梓行本」（『善本戲曲叢刊』第五輯、臺灣學生書局、一九八七、所收）を用いた。
- (5) 李克明『綴白裘新集序』には「玩花主人所編『綴白裘』、…乾隆癸未夏、有錢子沛思、刪繁補漏、循其舊而復綴其新、欲證當世之知音者」、程大衡『綴白裘合集序』には「玩花主人向集『綴白裘』、錢子德蒼搜採復增輯」、李辰『綴白裘二集序』には「玩花主人編『綴白裘集』、曩已往之傳奇、悅世人之心目」と言う。
- (6) 『綴白裘』は時代の推移とともに輯録内容、標目に若干の異同が見られるため、本稿では前掲注(4)「武林鴻文堂梓行本」によった。
- (7) 前掲注(2) 吳新雷氏にも該書の輯録散齣が列記されるが、目録のみによっているため所收散齣数を八十五齣に誤る。また『灌園記』『四德記』を佚書とするのも誤りである。尚、本稿では以上の刊本、鈔本については、「汲古閣六十種曲」は中華書局本（一九八二）、「暖紅室彙刻傳奇」は貴池劉氏夢鳳樓暖紅室本（一九一九）、「草廬記」は「古本戲曲叢刊」初集影印刊本、『伍倫記』は同初集影印刊本、『綵樓記』は同二集影印鈔本、『金印記』は同初集影印刊本、『浣紗記』は張忱石・鍾文・劉尚榮・樓志偉氏校注本（中華書局、一九九四）、『連環記』は張樹英氏點校本（中華書局、一九八八）、『金丸記』は「古本戲曲叢刊」初集影印刊本、『紅蕖記』は同三集影印刊本、『題紅記』は同二集影印刊本、『投筆記』は同初集影印刊本、『竊符記』は『中國戲曲善本三種』（思文閣出版、一九八二）所收影印刊本、『祝髮記』は隋樹森・秦學人・侯卿氏校點『張鳳翼戲曲集』（中華書局、一九九四）所收本、『還帶記』は「古本戲曲叢刊」初集影印刊本を用いた。
- (8) 『浣沙記』『范蠡遊春』『蠡迎西施』『西施採蓮』『西施憶鄉』は文林閣本、汲古閣本とも一致するけれども、「范蠡扁舟」が汲古閣本とは全く異なることから、文林閣本に依據したものであることが明らかである。
- (9) 「通行本」における原作脚本の變改については、湯顯祖の『還魂記』を題材として、「清代における『還魂記』の演變」（『日本中國學會報』第四十七集、一九九五）において詳述した。
- (10) 本稿では『玉樹英』『樂府萬象新』『大明天下春』は李福清・李平兩氏編『海外孤本晚明戲劇選集三種』（上海古籍出版社、一九九三）所收の影印本を、『纏頭百練二集』『萬錦清音』は北京圖書館善本特藏部藏本を用いた他は、全て

- 「善本戲曲叢刊」第一・二・四輯（臺灣學生書局、一九八四、一九八七）所收の影印本によった。
- (11) 田仲一成氏「十五・六世紀を中心とする江南地方劇の變質について（五）」（『東洋文化研究所紀要』第七十二冊、一九七七、二七三～二七五頁。後、『琵琶記』のみ『中國祭祀演劇研究』、東京大學出版會、一九八一、に再録）の分類により、田仲氏に引用されない選本の分類は私見による。
- (12) 前掲注（2）吳氏、周妙中氏論文。また林鋒雄氏「舶載書目所録綴白裘全集釋義」（『中國戲劇史論稿』、國家出版社、一九九五。原載『天理大學學報』第一四〇輯、一九八三、に大幅な補訂が加えられている）。